慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・ダンの "The Extasie" : 詩の構造に関する一考察
Sub Title	John Donne's "The Extasie" : A study of poetical form
Author	和田, 旦(Wada, Akira)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1959
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.9, (1959. 12) ,p.37- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00090001-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジョン・ダンの "The Extasie"

——詩の構造に関する一考察——

和田旦

The Extasie

(1)

Where, like a pillow on a bed,
　　A Pregnant banke swel'd up, to rest
The violets reclining head,
　　Sat we two, one anothers best.
Our hands were firmely cimented　　5
　　With a fast balme, which thence did spring,
Our eye-beames twisted, and did thred
　　Our eyes, upon one double string;
So to'entergraft our hands, as yet
　　Was all the meanes to make us one,　　10
And pictures in our eyes to get
　　Was all our propagation.

As 'twixt two equal Armies, Fate
    Suspends uncertaine victorie,
Our soules, (which to advance their state, 15
    Were gone out,) hung 'twixt her, and mee.
And whil'st our soules negotiate there,
    Wee like sepulchrall statues lay;
All day, the same our postures were,
    And wee said nothing, all the day. 20
If any, so by love refin'd,
    That he soules language understood,
And by good love were growen all minde,
    Within convenient distance stood,
He (though he knew not which soule spake, 25
    Because both meant, both spake the same)
Might thence a new concoction take,
    And part farre purer then he came.
This Extasie doth unperplex
    (We said) and tell us what we love, 30
Wee see by this, it was not sexe,
    Wee see, we saw not what did move:
But as all severall soules containe
    Mixture of things, they know not what,

Love, these mixt soules, doth mixe againe, 35
And makes both one, each this and that.
A single violet transplant,
The strength, the colour, and the size,
(All which before was poore, and scant,)
Redoubles still, and multiplies. 40
When love, with one another so
Interinanimates two soules,
That abler soule, which thence doth flow,
Defects of lonelinesse controules.
Wee then, who are this new soule, know, 45
Of what we are compos'd, and made,
For, th'Atomies of which we grow,
Are soules, whom no change can invade.
But O alas, so long, so farre
Our bodies why doe wee forbeare ? 50
They are ours, though they are not wee, Wee are
The intelligences, they the spheare.
We owe them thankes, because they thus,
Did us, to us, at first convay,
Yeelded their forces, sense, to us, 55
Nor are drosse to us, but allay.

On man heavens influence workes not so,
But that it first imprints the ayre,
Soe soule into the soule may flow,
Though it to body first repaire. 60
As our blood labours to beget
Spirits, as like soules as it can,
Because such fingers need to knit
That subtile knot, which makes us man:
So must pure lovers soules descend 65
T'affections, and to faculties,
Which sense may reach and apprehend,
Else a great Prince in prison lies.
To'our bodies turne wee then, that so
Weake men on love reveal'd may looke; 70
Loves mysteries in soules doe grow,
But yet the body is his booke.
And if some lover, such as wee,
Have heard this dialogue of one,
Let him still marke us, he shall see 75
Small change, when we'are to bodies gone.

一

一般に形而上学派という名で知られている一群の詩人の中で、代表的存在であるジョン・ダンは、哲学、科学、天文学等に関する豊かな学識から抽出したイメージを、特異なしかし巧妙な連結法をもつて詩に用いている。いわば「鵲か何かのように眼にとまつた思想の断片を拾い上げ」[2]、抒情詩に哲学を持ちこんだ彼にとつて、抽象的な論理も詩作の際には一種の感情の流れに過ぎなかつたのかも知れない。哲学から部分的に借用してきた素材も一旦詩の文脈中に織りこまれると、本来の抽象的思想内容に加え、その思想を感覚的に捉えた場合に生れる或る種の情緒が同時に存在することになる。かような抽象概念と情緒との共存状態から生ずる効果は極めて不可解なものであり、少なくとも両者を全く別物と考えるのに慣れている我々にとつては理解に苦しむ状態である。原始時代の人間は恐らく、例えば logic というような言葉で表わされるものを無意識の裡に体得しており、それを生きていたのではないかと想像される。この語も我々にとつては、所謂「感性の解体」[3]の結果、単に概念として知るべきものに過ぎない。ダンは言葉に内在する一見正反対なこれらの二つの要素を同一平面上で捉え、両者の間に精緻な関連性と調和を摸索しつつ詩作したのであろう。実際我々が或る種の原始感情、いわば詩的情緒を身に覚えるのは、牽強附会ともみられる語の結合の裡に、突然抽象語に潜んでいる独特の情緒を発見する場合である。一例として次のものを挙げることが出来よう。

……her pure, and eloquent blood
Spoke in her cheekes, and so distinctly wrought,
That one might almost say, her body thought;[4]

我々は社会的背景の変遷に従い、言葉に対し次々に与えられ追加されてきた様々な意味の重苦しい累積に悩まされており、原始人が本能的に感知していたと思われる最も original な意味を見失つている。それ故日常化された意味の幾重にも重なつた地層下に埋まつているこの本来的な意味を、語の或る種の結合乃至はリズムの巧妙な使用によつて発掘し、自己の詩的体験を表現する為にこれらの意味を統合

して、一調和体たる詩に造り上げるのが詩人の務めであると云えよう。この点からみれば、本質的には抒情詩も宗教詩も、まして形而上詩などというものもなく、あるのは唯、poetry だけなのである。

ダンにとつて形而上学とは、詩作に際してはいわば感知された思想だつたのであり、情緒そのものよりも、情緒を含蓄する思想の方がより詩的価値があつたのである。これを理解することは、彼が当時信じられていた哲学、宇宙論、自然科学、薬学、錬金術等から借用してきた奇異なイメージを使用しているという、単なる表面的な事実の把握よりも遙かに重要なことなのである。彼はかような広範囲に亙る素材を、本質的にみて詩的でないとは考えていなかつた。創作行為に於て、それらはすべて同等に彼に役立つたのである。重要なことは詩という調和をもつた一つのパタンを造り上げる為に、彼がそれらを情緒的に用いているということであり、その結果一見相反するものとみられる「思想」と「情緒」とを同化することによつて、彼の詩は難解であるとはいえ、読む者により強烈な印象を与えることになつたのである。この意味で *The Extasie* は、思想を情緒に変質せしめた、優れた例であると云うことが出来る。

ここで詩の構造に就いて簡単に触れておかねばならない。I・A・リチャーズは、「普通考えられているよりも更に多くの詩が、構造の点で劇的（dramatic）である」[5]と述べている。勿論常識から考えても、詩と劇とは全く異なるものである。詩と関連を持つのは、劇の筋でもなければ台詞でもなく、また人物達の動作でもない、それらすべてが関与している劇全体の核心に存するものなのである。換言すれば、舞台の上に矛盾葛藤を経て終結部に移つてゆく一つの流れを感ずるのと同様、詩に於ても――たとえ使用されている言葉が知的なものであり、そこから抽象的論理を独立に抽出したくなるような場合でも――逆説的乃至アイロニカルな表現を経て、或る種の調和に導かれてゆく感情の動きを感知し得るのである。優れた劇を前にした観客は、舞台で語られる言葉そのものに対しては殆ど無意識であり、まして台詞の論理的妥当性に就いて云々するようなことはない、唯いわば 'physically justified speech' を通して劇的な感情の発展経過を身に覚えるのみである。この過程を詳説することは当然なことながら不可能であるが、極く大凡の分類をすれば、始めに対立する主題が呈示される導入部があり、続いてこれらの撞着が生ずる発展段階を経て、両者が和解に導かれる終結部に達する。勿論実際には更に複雑なヴァリエーションが附加されているのであるが、いずれにせよもし詩の構造を解明するのに dramatic analogy を採用するならば、詩とは劇的過程がイメージによる情緒で表現されてゆく想像上の劇であり、詩の中の言葉はこの過程を完成する為の情緒を喚起す

る手段である、と云えるかも知れない。勿論普遍的法則を立てるには余りにも詩の形式乃至スタイルは変化に富むものであるが故に、公式的論理の適用が不可能であることは云うまでもない。

The Extasie の構造が如何なるものであるかを考察する前に、ここでこの詩に現われる様々な種類のイメージを解明することが必要であろう。これと関連して、T・S・エリオットの次のような警告を念頭に置いておくのも無駄ではない。

「我々は或る詩人の生きていた時代、社会情勢、彼の著作に示されている当時の思想、または言語の状態などに関する知識、即ち事実に関する知識を詩の理解と混同してはならない。かような知識は、詩を理解するのに必要な準備なのである。（中略）大切なのは異なった時代に生き、異なった言語を話す、詩を楽しみ得るすべての人々にとって同一の経験なのである。」(6)

二

詩に於けるイメージは、機能の上からみれば音楽に於ける音調、乃至は絵画に於ける色調と同一のものと云えるかも知れない。我々はそれらの個々の存在にとりわけ注意を払うことなく、それらを媒体として芸術作品全体を感受することが出来るのである。個々の部分をなす音や色そのものには、何ら分類し得る知的乃至感覚的意味合は存在せず、唯それらが裡に含む様々な情緒の attitudes が、作品全体の持つ主要な attitude に吸収されているのを感知し得るのみである。しかしながら我々は日常生活に於て、一般に言葉を完全な伝達手段と考えているので、詩の場合とかくイメージの真の機能を見失ってしまい、言葉の持つ通常の意味の世界にさまよいがちである。詩の中の個々の言葉は、普通の意味では何ものをも意味しないのであり、肝心なのは言葉そのものではなく、言葉と言葉との連結の仕方にあるということ、また日常化された言葉の使用法によっては決して焦点を合わせることが出来ず、唯詩人のみが把握し得る或る心の領域が存在するということは、一応頭に入れておくべきであろう。

The Extasie は、菫の咲いている「ふつくらと盛上った土手」の上に坐る、恋人達の描写で始まる。菫のイメージは、この花と田園に於ける愛の語らいとの伝統的な連想に拠ると同時に、豊かな官能的雰囲気をも裡に含んでいる。(7) "pillow," "bed," "pregnant,"

"swel'd up," "violets reclining head" "propagation" などの語があるので、我々の関心は必要以上に何か官能的なものに向けられるのであるが、前述のようにイメージは独立したものではなく、あくまでも詩の一部であり、詩の中にその表現をみるや、これらの言葉は個々の意味を失つたと考えてよい。1—12行では、恋人達の出合を描く際のダンの冷静な態度が目立つ。彼の卓越した wit——あらゆる経験の表現の裡に含まれ得る、別の種類の経験を認識する機能をはらんでいるもの[8]——により彼は、肉体に附随したものに関連させて、"cimented," "thred," "entergraft," "pictures" の如き語を見出し、官能の色合の濃いこの導入部を冷やかな客観性をもつて描き出すことに成功している。二人の恋人は手を握り合い、互いに見詰め合う以外は何も為し得ない。二人共この心の不安定な状態から逃れようとその解決を待ち、無意識に魂の結合を求めているのだが、目下のところ彼等を一つにする手段は手と手を「接木する」ことであり、その結果産み出されるものはお互いの眼に映し出される映像に過ぎない。ここで掌から滲じみ出る "fast balme" が女の多情で多産な性格を暗示し、また眼が "propagation" の行なわれる場であることは、魂の恍惚境に達する前の恋人達の態位を描くのに、かなり人の意表に出た表現と云えよう。

続いて、グリアスンの言葉を借りれば、"the exodus of the souls" が「互角の力で相対する軍隊」という比喩を通じて示される。勝負がどちらとも決まらぬ両軍の置かれた不安定な状況を、ダンが何処から取つたのか、その source は明らかではないが、13—17行が二人の魂に適切な役割を与えている点で、この直喩は卓抜である。ダンはこの詩を書くにあたつて、新プラトン派の哲学にみられる 'extasie' の定義、「魂が肉体から抜け出て神の姿を見るに至る心の状態[9]」から暗示を受けたのであろうが、いずれにせよ魂を軍使と見立てるようなイメージを、このように効果的に用いた詩人は余り無いであろう。「墓場の石像の如き」完全な静けさは、魂の去つた後の肉体が死体同様であることを示し、かくて二つの魂は自由に "dialogue of one" (l. 74) なる同じ言葉を語り始めるのである。だがその前にこの魂の言葉を聴くべき第三の人間が示される。これは深遠且つ奇妙な「対話」を正当化する為に、詩人が客観的観点を必要としたのであろう。*Aire and Angels* に於て、愛は魂の子であると述べている[10]ので、20行にみられるように、この傍聴者は魂達の語る対話の意味をよく理解出来る人間ということになる。

そしてこの詩の主要な主題たる、同意見であり同じ言葉である二人の魂の「対話」が始まる。29—36行で注目すべきは、"sexe" が

近代的な意味で初めて用いられたことである。この事実は肉体的快楽に対する、ダンの非ロマンチックな科学的態度を示すものと云えよう。32行は次のようにパラフレーズ出来る。「我々は今や、我々の愛の源泉が何であるか、以前は解っていなかったことを知った。愛は肉体の美から生れるものと思っていたが、その源泉は魂にあったのである。」続く33—36行は註解を必要とする。中世に於ては宇宙の秩序を三つの形態に分類していたが、その一つに chain of being がある。それによると人間は獣と天使の間で重要な地位を占め、内部には vegetative, sensitive, rational の三つの魂を持っていた。[11] ダンはこの混合物である魂を念頭に置き、"Love, these mixt soules, doth mixe againe." という、人を惑わす表現を使ったのである。かくして二つの魂は全く同じ elements からなる同一のものとなり、夫々 "this"（彼の魂）とも "that"（彼女の魂）とも呼び得るのである。

ダンが次のスタンザ（37—40行）を置いた動機は明らかでない。一見イメージが文脈と無関係の如くみえるからである。"a single violet" は詩の冒頭に出てくる数行を想起させるのであるが、この四行が難解な論議の間に挿入されているにせよ、或る種の官能的アリュージョンは否定出来ないであろう。見たところ魂の問題に該当するものはないが、「菫」のイメージは次のスタンザに対応するものと思われる。即ち "so"（l. 41）の微妙な用い方により、次の四行を35—36行と同様37—40行にも結びつけて考えることが出来る。さて、ここで "that abler soule" の意味合が甚だ曖昧である。この魂は二通りに解釈し得る。即ち二つの魂が一つに結合したものと見る場合と、全く新しい oversoul の如きものが二つの魂の結合によらず、'interanimation' のお蔭で生れ出たとみる場合である。しかしながらこの新しく生じた魂は質の上で、前述した rational soul と同じものと思われる。これは次の詩句をみれば明らかであろう。

But as our Soules of growth and Soules of sense
Have birthright of our reasons Soule, yet hence
They fly not from that, nor seeke presidence:[12]

或いは

Wee first have soules of growth, and sense, and those,
When our last soule, our soule immortall came,

Were swallowed into it, and have no name.[13]

chain of being に於て人間が動植物と区別されるのは理性（reason）を持つている点であり、この理性は悟性（understanding）と意志（will）とに分けられる。この二つの能力は人間にあつては可変性のものであり、教育乃至は'nurture'により、神の使者であり人間の守護者である天使を仲立ちとして、神の意志に近附くことが出来る[14]とされた。人間の有する三種の混合体である魂もまた'educative'であつて、この詩に於ける"abler soule"も二人の rational souls が結合したものであり、愛の力によつて下位にある他の二種類の魂はその中に吸収されてしまつたとみてよい。そしてこの「新しい魂」は天使の持つが如き自由意志を通じて、今や聖なる恍惚境を望み得るのである。

Wee then, who are this new soule, know,
Of what we are compos'd, and made,
For th'Atomies of which we grow,
Are soules, whom no change can invade. (ll. 45-8)

ダンはここで"Atomies"（=atoms）という化学用語を採用し、"new soule"の性質を極めて客観的に説明している。恐らくこのスタンザでは魂に言及しつつも、やがて来たるべき肉体的結合を幽かに暗示しているのであろう。この点に関しエムプソンは"know"（l. 45）を取り上げ、これが'Adam knew his wife.'の場合と同じ意味合を持つとし、更に"of"（l. 46）を一歩進めて'by means of'と解し得ると説明している[15]。勿論"know"の次にあるコンマは極めて重要であるが、"of"を'by means of'と取るのはやや疑わしい。"know"に暗に示されるものは、次の一行のみに生きているというよりも、寧ろ続く三行すべてにその余韻が行き渡つていると考えられる。その結果幾分断定的な"no change can invade."が、この詩の最後の行、"Small change, when we'are to bodies gone."と関連して効果的になるのである。

続いて魂の「対話」の主題が突然変化する。

But O alas, so long, so farre

Our bodies why doe wee forbeare?

They are ours, though they are not wee, Wee are

The intelligences, they the spheare. (ll. 49-52)

ここでダンは、肉体と魂の合一化を暗示する為に、極めて巧妙な言葉の魔術を行なつている。一読して幾分重苦しさを与える51行は、他の版にみられる "They are ours, though not wee, wee are" に比較して、韻律的にも修辞的にも遙かに妥当なものと云える。'intelligence' は天使を擬人化したもので、天使が決められた天空を「叡智」をもつて支配するところからきている。中世に於ては様様な地位の天使達が、九天の一つ一つを各自支配するものと考えられていたのである。ここで "intelligences" (恋人達の魂) が複数で、"spheare" (肉体) が単数で書かれている事実に注意すべきである。この点に就いてグリアスンは、「一つになつた (二人の) 肉体が天空であり、その中で二人の天使が邂逅し支配する」[16] と述べている。彼の明快な註解には同意出来るのだが、尚明らかにすべき点が残つている。即ち我々は、"That abler soule" や、"Wee then, who are this new soule" で、恋人達の魂が一体となつたのを既に見てきた。然るに52行では "intelligences" に象徴化された二人の魂は一つのものになつていない。このことを論理的に解釈しようとするならば、次のように説明出来よう。つまり一体になつた二つの魂が肉体の存在に気附いた時、これ迄体験していた霊的結合が僅かにくずれ、お互いに別個の魂を意識するようになり、今や魂達は肉体と魂の一体化により完全な結びつきを可能にする、一天空を支配しようとしているのである。それ故 "spheare" が単数であるのは、男が望んでいる肉体的結合を暗に示している為であると考えられよう。

We owe them thankes, because they thus,

Did us, to us, at first convay,

Yeelded their forces, sense to us,

Nor are drosse to us, but allay. (ll. 53-6)

ここでは歯擦音 's' の、やや性急な動きが目立つ。然も誘惑するかのようにこの動きが、"allay" という一語で停められる。"allay"

(=alloy) は合金に用いる卑金属で、貴金属を強靱にするものである。つまり56行は、「肉体は融合した魂達を覆う無用無価値なものではなくて、純粋且つ柔軟な結合を（実際的用途の為に）強化するもの」ということになる。55行に就いてグリアスンは、「我々の魂が一つになる前に、肉体はその力乃至能力（すべての種類の感覚、特に視覚と触覚、即ち手と眼）を我々に与えねばならぬ」[17]と説明している。かくして microcosm と macrocosm (ll. 51-2) が、肉体の結合を妥当ならしめる目的で、巧みに対応させられたのである。

On man heavens influence workes not so,
But that it first imprints the ayre,
Soe soule into the soule may flow,
Though it to body first repaire. (ll. 57-60)

天体は人間にその霊気による影響力を与える際に、先ず空気に波動を与えねばならない。中世に於ては、天体が人間の体質に影響を及ぼし、心を様々な状態に変化させるということが一般に信じられていた。それと同様に、人間同士の魂の相互作用も肉体という媒体を通してのみ可能だ、とダンは云うのである。60行の譲歩節は、その negative な性格の故にかえつて positive な効果を出している。

続く61—68行は、この詩の中で最も絶妙な部分である。ここでは精妙な学説が慎重に文脈中に溶けこませてあり、肉体と魂の和解の地点を我々に、定かならぬ手つきで摸索させる。

As our blood labours to beget
Spirits, as like soules as it can,
Because such fingers need to knit
That subtile knot, which makes us man:
So must pure lovers soules descend
T'affections, and to faculties,
Which sense may reach and apprehend,

Else a great Prince in prison lies. (ll. 61-8)

エリオットがダンテに言及して述べている次の言葉の好例を、この八行に見出すことが出来よう。即ち、

「詩人としてのダンテは、アクイナスの宇宙論や魂に関する説を信じていたのでもなく、信じていなかったのでもない。彼は単にそれを利用しただけなのである、或いは詩を作るのに最初の衝動となった情緒と、或る学説が融合したのである。」(18)

実際、詩人と彼の信念との関係を解明することは困難であり、この引用文にもみられるように、十分納得のゆく解答は望み得ない。唯、「利用する」為には当然のことながら、或る学説を理解していることが必要であり、（人間として）信じていればそれだけ理解の程度も深い訳である。さて61—64行は極めて難解である。中世の生理学では spirits という血液から発散する稀薄な気体乃至液体が体内に存在するとされ、これが三つの種類に分類されて、体内の発生する場所により夫々 natural, vital, animal と名附けられていた。これらのものは魂に働きかけて感情（sensations）を生ぜしめ、これによって肉体の各器官が動くのである。そしてこの非実体的元素は屢〻、62行にみられるような新しい魂を形成するとされた。グリアスンはバートンの *Anatomy of Melancholy* の一部を引用している。

Spirit is a most subtile vapour, which is expressed from the Bloud, and the instrument of the soule, to perform all his actions; a common tye or *medium* betwixt the body and the soule, as some will have it; or as *Paracelsus*, a fourth soule of itselfe. (19)

そこで我々は、血液が魂のように純粋な spirits を産み出す時、"such fingers" (l. 63) (*i.e.* spirits) が極めて微妙且つ捉え難い「結び目」——「肉体と魂とを繋ぐ共通の絆乃至は媒体」で、我々をすべての能力を身につけた人間に造り上げている結び目——を結び得ることを知る。このように深奥な学説を詩に作り上げる際に、ダンは語の選択に卓抜なところをみせている。即ち "labour" は陣痛を起す意であり、"fingers" は詩の冒頭で恋人の手が握り合わされていたことを想起させ、また "knot" を結ぶとは結婚を意味する、などである。かくして生理学の学説は巧妙に発展させられ、65—68行に於て或る種の官能的意味合を持つに至る。ここでは主要語たる "apprehend" が 'know' の意味であると同時に、語原的にみた 'clutch,' 'seize' の意味が表面に出ていることは暗示的である。"Prince" なる直喩は、愛し得る能力を持ちながらも、不完全な肉体の中に閉じ込められて無能となった魂を明快簡潔に描き出し

ている点で、極めて効果的である。もしこの詩を単に誘惑の過程を劇化したものと考えるならば、この比喩は次の "To'our bodies turne wee then" と関連して、極めて重要な意味を持つであろう。何故ならばこの行にのみ、"a great Prince" に具現化された男性が出現するのであり、他の行では常に "wee," "us," 乃至は "her, and mee" と男女が殆ど一つのものとして示されているからである。しかしながらダンはここで、具体的なイメージにより肉体と魂の不可思議な関係を表現せんとしているのであり、問題となるのは "Prince" の身につけた特性と魂のそれとの類似性であり、たとえ男の女性に対する欲望が低音部のように感じられるにせよ、官能的なものへの直接的言及はないとみた方が妥当であろう。

And if some lover, such as wee,
Have heard this dialogue of one,
Let him still marke us, he shall see
Small change, when we'are to bodies gone. (ll. 73-6)

この結びの部分で重要なのは "dialogue of one" という逆説的表現である。これは

……(though he knew not which soule spake,
Because both meant, both spake the same) (ll. 25-6)

に示されているように、二人の魂が恰かも一つのものであるかの如く、同じ内容を語っていることに起因する。我々は詩の終りに来て、この「対話」に呈示された霊的結合が、肉体的結合を達成せんが為の予備的手段であったことに気附くのである。これと関連して、"wee" (l. 73) の用法に就いて考えてみよう。この "wee" は、魂達の対話が最後の行まで続くにも拘らず、これ迄とは異なり二人の魂ではなく恋人達自身を指している。これは次のように説明することが出来る。"wee" は主語である "some lover" の背後に隠れているのだが、この二人の恋人も "some lover" 同様、自分達の魂が語る「対話」を聴くことが出来、たとえ魂達が愛の成就の為に肉体に戻ってゆくにせよ、自分達の愛は以前と同じ高さと深みを持つことに気附く、という訳である。

三

主要な点は、ダンがここで‘extasie’の概念、「肉体から離脱した魂が絶対唯一の神を見るに至る心の状態」[20]を巧妙に利用していることである。勿論彼は愛が肉体の関与なしでは達成出来ぬことも、愛が肉体と魂の均衡調和の所産であることも知つている。ここで誘惑の場面を詩に作り上げるに際してこの表題を採用したことは‘extasie’が高度に純粋化された心の状態であり、当然肉体の愛と相容れぬものであるが故に、アイロニカルな意味合を裡に含むことになる。そこでこの詩の根底に横たわる metaphor は一種のパラドックスを孕んでいると云える。この詩に出て来る二人の恋人は、自分達の体外に抜け出た魂を意識する程愛によつて純化されているのだが、男の望むのは肉の愛であり、それを得る為に魂の肉体への復帰を正当化するような、難解極まる諸学説を手際よく提出してゆくのである。

詩人は自己の経験の統一を詩という媒体を通じて表現する際、常にその経験内容の多様性に意を用いなければならない。それ故必然的にパラドックスや曖昧な表現が生ずる結果となる。詩的体験の裡には、無数の雑多な小経験から生ずる情緒が不安定な互いに脈絡のない状態で存在し、一貫性を有する「全体」として表現される為に、決定的パタンの出現を待つているのである。我々は筋道の通つた論理に従つて言葉を用いることに慣れているので、屢々パラドックスの真の機能を見失いがちであるが、詩人が用いる言葉は個々に分割された意味を持つ断片ではなく、寧ろ意味の荷電体、或いは種々の意味の連鎖物と見做すべきである。それ故パラドックスは単なる非論理的な言葉の羅列ではなく、いわば対立するものの同時的主張である。その例は多くの宗教語や、著名な詩句に見ることが出来よう。

He who would save his life, must lose it.

The last shall be first.

或いは

Fair is foul, foul is fair.

The Child is father of the Man.

いずれにせよ詩作に於て最も重要なことは、経験の裡の対立的不協和的要素を調和させることであり、詩人が追求する目的は程度の差こそあれ、詩の中に逆説的 situation を設定することにより達せられるのである。

The Extasie を読むと、我々は霊的な装いの下に肉体的結合を暗に示している、幾つかの語を指摘することが出来る。ダンはここで玄妙不可解な学説を採用しているのだが、霊肉両者の間に類似性一致点を、一見論理的な学説の深遠さに惑わされることのない 'tough reasonableness'[21] をもつて洞察し、然る後に詩の中に取り入れている。彼の関心事は肉体的愛を説くことでもなければ、ましてや精神愛の神秘的状態を描き出すことでもなくして、背反的要素である肉体と魂との精妙な関係の裡に poetry を見出すことなのである。ここで poetry というのは、もし当時の宇宙論による類推が許されるならば、microcosm に於ける「天体の調和」であり、その、内部に動きを孕む完全な静寂さの中で、我々は肉体にも魂にも個別的関心はないのである。この詩の主調をなすパラドックスは、詩人が故意に肉体的愛を、恰かもそれが精神的愛の所産であるが如く扱つていることである。即ち二人の魂は、表題に示されているように肉体から離脱して霊的な属性を身に附け、神秘の状態にあるのだが、この同一の言葉を語る魂達の役割は決して神聖な愛を擁護することではなく、逆説的に肉体的結合の必要性を自分自身に納得させることなのである。そして我々の主たる関心は、魂達の語る言葉が如何にして自分達の肉体への復帰を妥当なものとするか、換言すればその「対話」が表面的には論理的に、肉体と魂とを結びつけ得るイメッジを類比的に追求してゆくことにより、如何にして相反する両者を和解に導くか、ということに向けられるべきであろう。

単に便宜上、大凡の分類をすると、この詩は四つの部分に分けられる。即ち、1—20行は introduction, 21—48行は development, 49—68行は climax, 69—76行は conclusion となる。（人によつては、かような小型の詩に大袈裟な分類を適用したことに対し、幾分嫌悪の念を抱くかも知れない。しかしながらこれらの語は、芸術作品が有する構造に内在している 'dramatic' な性格の意味合を、単に暗示する為の手段に過ぎない。例えば、conclusion は物語の終りではなくて全体の完成である。この意味から云えば、conclusion は introduction に既に存在していると云うことが出来る。）

官能の雰囲気に包まれた土手の上に、無気力な様子で坐つている二人の恋人が、"Extasie" という表題の附けられた神聖なる世界に導き入れられる。一体になる為に彼等が為し得ることは、唯手を握り合うことと視線を交えることに過ぎない。彼等の姿勢が暗示する

決断のつかぬ状態は、その解決を期待する或る種の不安定な感情を喚起する。勿論我々は一見したところ、この判然としない不動の状態が何を意味しているのか判らないのだが、幾つかの性に関連した言葉から、男の欲望が相手の女性の肉体に向けられているように感ずる。そこで我々は無意識の裡に何事かが起るのを漠然と期待する。次の瞬間魂の離脱が起り、彼等の肉体は幾分我々の予期に反し、死んだようになつて後に残されるのである。"two equall Armies" の直喩は、官能を暗示するものが突然精神的超脱により取つて代られる、このアイロニカルな状況を描くのに極めて効果的である。これにより我々の眼は新しく出現した 'character,' 即ち肉体から抜け出て今や両者の間に懸つている魂達に向けられる。その結果、恋人達が身に附けていた官能の装いから、我々の注意はそらされてしまう。二つの魂は死の状態に近い肉体に対し、その死活に関する支配権を握つており、魂達の "negotiation" はその面前で語られるのである。この導入部で注目すべきは、前半と後半に於ける夫々の姿勢に暗示される、性と死の奇妙な対照である。死というのは単に、魂の去つた肉体は死体に過ぎぬという事実に拠るものであるが、"We like sepulchrall statues lay" に示される、いわば 'death in life' の状態は、性的雰囲気との対照の裡に、より鮮明化されるのである。この部分は *The Canonization* のこれと似た内容を持つ、次の数行を我々に想い起させる。

> We dye and rise the same, and prove
> Mysterious by this love.

> We can dye by it, if not live by love,[22]

十六・七世紀に於ては、'to die' は slang で愛の行為の完了を体験する意味であつた。恋人達は行為の後起き上り、愛の力によつて再び生きるのである。(勿論引用の詩に於ても性的意味合は、不死鳥にたとえられた恋人達の結合した魂が、情欲に焼き尽くされた肉体という灰燼から再びよみがえる様を描くのに、効果的に使われているのである。) 問題になつている死の意味は、愛により純化された後、死んだような肉体が再び生命を取り戻すことを、予め暗示しているものとも取り得る。前半の部分に出てくる性に関連した要素は、愛のパラドックスであるこの 'death in life' を言外に解き明かす鍵と考えてよいかも知れない。

二つの魂の劇的な呈示に続き、一人の傍聴者の存在が示される。ダンにとり詩作とは劇化のことであり、自己劇化を成就する為に彼は"within convenient distance"に立つている、客観的第三者を必要としているのがこれによつて判るであろう。この詩に出てくる人間は、魂の言葉を理解するべく、"good love"により洗煉されていなければならないのである。何故ならば彼の超脱的な関与によつて始めて、「対話」が real なものとなり、肉体と魂の相互依存が裏書きされるからである。括弧の中の譲歩節(25—26)は魂の言葉の同一性を述べているが、両軍から派遣された'negotiator'が同じ言葉を語るのは妙なことかも知れない。しかし勢力相伯仲する状況下では両軍いずれにも勝利は得られず、魂達は当然同じ意見を持たざるを得ないのであり、後に示されるように肉体の結合(両軍の和解)の必要性を説かねばならぬのである。それ故傍聴者がこれから聴くのは、肉体愛の必然性を主張する為に尤もらしい論理を捏造する魂達の言葉ということになる。しかもその言葉の妥当性が前もつて巧みに肯定されているあたり、詩の部分と全体を結びつけるダンの強烈な融合力を示すものである。即ち

He……

……

Might thence a new concoction take

And part farre purer then he came. (ll. 25-8)

そして魂達の対話が始まる。第三者によつて導き出されたこの部分は、アイロニカルな situation を呈示する目的で'extasie'の概念が最高度に利用されている点、極めて重要である。つまり肉体から離脱したお蔭で魂達は最初、自分達の高度に純粋化された状態を自ら称揚するのであるが、類推的にイメージを求めてゆく過程を経るうちに、彼等の語る主題は次第に精神愛から肉体愛に変化してゆく。48行迄は後者は含蓄的に、比較的穏やかな音調で語られる。最初の八行をパラフレーズすると、(1)我々は今や'extasie'のお蔭で我々の愛が肉体の美に拠つたものではないこと、肉体の中にあつた時は判らなかつたが、愛の源泉は寧ろ魂にあつたことを知る。(2)我々の個個の魂は夫々三種の魂を裡に含んだ混合物であるので、愛はこれらの混合した魂を再び混ぜ合わせ、両者を同一のものとする、となる。さてこの二文を比較すると、或る程度対立的であることが判る。(1)では魂が愛の源泉であると述べ、(2)では愛が魂に働きかけると述べて

いるからである。それ故接続詞の“But”(l.33)の微妙な用法は、魂の立場を愛との関連に於て、能動的なものから受動的なものに変えてゆく意味で重要である。詩人はここで肉体的結合の準備として、予め魂達を結びつけることを必要としているのであろう。我々は彼が二人の魂を「混合する」だけの目的で「混合した魂」というスコラ哲学の説を利用したと考えざるを得ない。彼にとっては学説自体が詩材であり、それを文脈中に融合する際に、単にその真実性の一面のみを必要としていたように思われる。続いて詩人は突然調子を変え、分析的合理性を反映する音調から、詩の冒頭で官能的場面を描いた時の、田園的情緒を暗示する音調に移ってゆく。この転調はダンの変化に富む情調の魅力を明示するものである。類比点を探り当ててゆく彼の柔軟な手つきは、次の例にみられるような、いわば「変化」の法則に拠っているのかも知れない。

Change'is the nursery
Of musicke, joy, life, and eternity.(23)

ここで問題になるのは、菫が今やその“reclining head”をもたげようとしているという字義通りの意味でなく、学説に言及している合間に突然菫のイメッジが現われることにより、我々が魂の問題に対して曖昧な気持を抱いてしまうことである。この曖昧さは与えられた situation の中に他の様々な様相の経験を融合させ、別の新しい調和体を造り上げるダンの創作態度から産れ出たものである。即ち彼の主たる関心は、魂や菫に個別的直接的注意を向けることなく、異なれる層の経験を統合することであった。彼は動揺する情緒の動きが示す、曖昧さそのものの裡に一貫性(coherence)を見出す為に、イメッジから生ずる絶えず変化してゆく情調を必要としたのである。いずれにせよ表面的には菫のイメッジが魂との関連性を持たぬので、これが“Defects of lonlinesse controules.”(l.44)にその官能的意味合を反映させ、“abler soule”の機能を明確な具体性をもって示していると考えられよう。この新しい魂の誕生する過程で我我の注意を惹くのは、“wee”(同じ言葉を語っている二人の魂)が、この魂の出現に就いて恰かも局外者のような口調で語っていながら、一旦生れ出るや直ちにそれに同化してしまう融通性を持っていることである。恐らく詩人がここで必要としているのは固く結び附いた魂であり、これが愛の核心をなすものとして肉体の結合に保証を与えるのである。そして29—44行の *crescendo* で展開してゆく passage に於て“wee”は、この‘authentic’な合一化を待っている、単に名ばかりの魂に過ぎないのである。この点からみて我々

は、development の終りに当たる部分を、肉体的愛に向かう準備が完了したことを暗示するものと考え得る。即ち

Wee then, who are this new soule, know,
Of what we are compos'd and made,
For, th'Atomies of which we grow,
Are soules, whom no change can invade. (ll. 45-8)

二人の魂がかように極度に洗煉された状態に達した今、彼等の肉体は全くその支配下にあると云ってよい。

climax は、一つとなった魂達が肉体からの離脱を嘆く、劇的な音調の悔恨の情で始まる。この部分に紛れもなく、この詩の中で最も重要である。ダンはここで霊肉結合の目的で、入念且つ慎重に諸学説を採り上げている。前半（49—60）では魂と肉体との関係が中世の宇宙論に拠って述べられ、後半（61—68）では同じく生理学に従って示される。人によっては、ダンはここで人間の性質を解明する目的で macrocosm と microcosm との間の詳細な類似点を説いているのだ、と云うかも知れない。[24] しかし我々がここで問題にするのは、その比較内容を明示することではなく、二種の宇宙の概念の間で迅速な連想が行なわれてゆく過程そのものを感知し、「学識という勢力が情緒を援助する為に絶えず動員されている」[25] 事実を知ることである。この部分を概観してみると、二人の魂が神聖な合一化に向かい高められていった後、今や一つになった魂が下降音階のように下方に降ってゆくのが印象的である。即ち魂達は最初一つの天空を支配する二人の天使に、続いて空気を通し人間に影響力を与える天体に、最後に人間の内部にあって諸感情や動作を惹き起す能力を持つ 'spirits' に、夫々たとえられる。ダンにとっては、魂達のかようなすばやい変身を妥当ならしめる論理の動きそのものが、情緒的経験であったように思われる。そして我々がここで感ずるのは、彼の巧妙な論の進め方から生ずる感情の抑揚を通じ、神聖な愛から卑俗な愛に降ってゆく或る種の快い下降の情調であり、その動きは決定的な響きを持つ表現、"Else a great Prince in prison lies." で停められる。さて、この部分を細かく調べてみると、先ず気が附くのは次の六行に含まれるパラドックスである。

They are ours, though they are not wee, Wee are
The intelligences, they the spheare.

We owe them thankes, because they thus,
Did us, to us, at first convay,
Yeelded their forces, sense, to us,
Nor are drosse to us, but allay. (ll. 51-6)

ここでは大宇宙と小宇宙とを対応させているのだが、最初の二行で天空（即ち肉体）を支配していた魂が、後の四行では肉体の支配下に置かれていることは、次のグリアスンの註解をみれば明らかであろう。即ち「知覚力は魂が持つている機能である。（略）しかし肉体も同じ機能を持つており、これなくしては魂はその機能を果し得ぬ。この（肉体の）機能は感覚である。」[26] 然して我々はこの六行が暗示するように、天空により支配されている天使を想像出来ようか。そんなことはあり得ないので、両宇宙を対応させるダンの論理的手法は非論理的と云わねばならない。実際問題として詩に於ける首尾一貫性（coherence）は論理的なそれとは異なるのであり、彼がイメージに課したロジックは、晦渋な諸学説をアナロジカルに展開する場合、これに対して一貫性を与えるような種類のものである。そして今問題になつている部分に於ける一貫性とは、次のパラドックスに基づいている。即ち、我々（魂達）は肉体を力強く支配する魂である、と述べた後に、唯肉体の助けによつてのみ魂はその機能を遂行し得る、と主張するのである。このことは、肉体愛の妥当性を証明する為に詩人の関心が、非論理性とは無関係に、単数の天空が暗示する結合した肉体を支配し得る魂の能力と、肉体と魂の間で行なわれる相互作用の可能性とを結びつけることに向けられているためであると考えられる。この詩で用いられているダンのロジックは、各スタンザに於てのみ、合理的にみて妥当であると思われる。その各々が幾分牽強附会的な方法で連結された時、屢々非論理的乃至逆説的 situation が生ずるのである。詩に必須なものは勿論かような曖昧多義な situation なのであり、我々は外ならぬ曖昧さによつて、非論理的に結びつけられた二種の論理的叙述が調和するのを感知し得る。一口で云えば詩にみられる一貫性は、論理的妥当性でなく矛盾性不連続性の認知を通じて直覚されるものなのである。

さて二種類の宇宙の逆説的な比較は "Nor are drosse to us, but allay." という肉体愛を暗に示す行で終つており、我々はこの非論理的な situation の裡に、肉体の結合と関連して、"spheare" と "allay" との緊密な結びつきに気附く。これがこの部分に

coherence を与える上で効力を持つ訳である。続いて詩人は大宇宙と小宇宙とを統合しようとする。

On man heavens influence workes not so,
But that it first imprints the ayre,
Soe soule into the soule may flow,
Though it to body first repaire. (ll. 57-60)

ここで我々は、"heavens influence" を仲立ちとして天体と人間を直接結び附けることにより、前述のパラドックスが和解に導かれるのを知る。この部分の大意を取ると、「天使に象徴された魂が空気を媒体として人間に影響力を与えるように、恋人達の魂も肉体を通して互いに作用を与え合う」のである。かくして肉体に対する魂の優位性と、肉体と魂の相互作用とが両立し得るものであることが示された。

天上にあつた魂達は今や、microcosm の内部に肉体と魂の邂逅する地点を摸索し始める。この後半部に於てダンは、中世の生理学の学説を採用し、肉体愛の正当なることを示そうとする。ここで初めのスタンザ（61—64）と後のスタンザ（65—68）の巧妙な対照、いわば 'ascent' と 'descent' の対照に注意すべきであろう。詩人はこう云うのである。「血液が魂に近い純粋さを持つ spirits を産み出して、"that subtile knot" を結びつける為に自身を高めようと努めるのと同様、魂達も肉体が有する機能の助けを借りて肉体と魂の合一化を計るべく、感覚の領域に下つてこなければならぬ。」ダンはここで、肉体と魂が夫々上方或いは下方に互いに近附いて来る様子を、spirits に関する非常に難解な学説を巧みに用いて入念に描いている。肉体と魂の分離（15—16）がここで再び結合に導かれる意味で、この部分はこの詩の精髄とも云えよう。我々の注意を惹くのは、両者の接近によりその結合が得られるか否かを説くことなく、寧ろアイロニカルにかの捉え難い結び目を結び損なつた場合を描き、次のように一息で述べていることである。

Else a great Prince in prison lies. (l. 68)

climax の最後にあたるこの行は、議論調の様々な感情の起伏があつた後、恋人達の精神愛が到達する必然的結果を鮮明な色調で描き出すことに成功している。

conclusion に至り、心弱き者に教示するという口実の下に、肉体の愛への意向が始めて公然と示される。

To'our bodies turne wee then, that so
Weake men on love reveal'd may looke;
Loves mysteries in soules doe grow,
But yet the body is his booke. (ll. 69-72)

これまで深奥な諸学説から取られたイメッジにより暗示されてきた肉体と魂の関係は、ここで本とその内容にたとえられる。即ち肉体の上に愛の表現を見なくては愛を信じ得ぬ人々に、"loves mysteries" を十分読み取ってもらう為である。ここで詩人は魂の肉体への復帰を他人に是認させるのであるが、これによって霊肉統合の為に論じてきた、その結果が客観的に認められることになる。詩人の心の裡にはこの女性に対する特別な関心はない。彼にとって問題なのは、彼女との関係の裡に感知した特異な経験を表現することなのである。彼の関心は「豊かな類推によって、愛し合っている状態、或いは寧ろその様々な状態を劇化し分析し説明することにある」[27]のである。詩作に際し詩人の狙いとするものは、前述の coherence に外ならない。しかもこれは、多かれ少なかれ異質の矛盾した諸経験が、名状し難い形態で一つのかたまりとなって存在している不安定な状態の心を、論理的に解明しようとするのでなく、様々な要素が緊張のうちにぶつかりあって劇的に結びついた、経験の複合体として言葉に表現する際にのみ、得られるものなのである。*The Extasie* の場合、対立する根本的な要素は恋愛状態にある肉体と魂であるが、この詩人は普通の意味でそのどちらをも強調することなく、両者の統一調和に意を用いつつ一調和体たる詩を完成してゆくのである。それ故 conclusion に於ける客観的観察者の存在も、21—28行の傍聴者同様、二種の愛を統合せんとする魂の尤もらしい論究が実際の成果をあげ得る為に、巧妙に仕組まれたものに過ぎない。これと関連して我々は最後の四行に極めて重要な語句、"this dialogue of one" を見出すことが出来る。

And if some lover, such as wee,
Have heard this dialogue of one,
Let him still marke us, he shall see

Small change, when we'are to bodies gone. (ll. 73-6)

既に前章で述べたように、この'dialogue'は漠然と、それ故巧妙に"wee"(l. 73)(即ちここだけは魂達ではなく恋人達)に向けられている。これによりこの逆説的表現が魂達の語つている同一語を意味すると同時に、少なくともこの箇所では、魂などの抜け出ていない普通の条件下にある二人の恋人に聴かれることを予期している言葉と考えてよい。さてここでダンが、恐らく無意識にではあろうが、どういう意味で"dialogue of one"という言葉を用いているかを考えてみよう。彼の殆どの恋愛詩に於て、女主人公は通常漠とした'thou'か'she'乃至は愛により純化されて見分け難く'I'と結びついている'we'で示されている。というのはダンは相手の女性との関係の裡に、男女の統一された状態を求めようとする欲望に憑かれた人間であり、彼の恋愛詩の創作とはpoetryを通じその統一性を追求することであつて、そこでは特定の女性の名を挙げる必要は全くなかつたからである。彼の大なる関心がかように女性との同一化の状態を詩に表現することであつてみれば、ここから生ずる詩それ自体が"dialogue of one"とも云い得るのである。*The Extasie*では、この"dialogue"は魂の語る言葉なのであるが、我々はそこにダンが語つている声を聴く思いがする。更にこの詩全体をも、「一人の対話」と呼ぶことが出来るかも知れない。そしてもし音楽の持つ構造から類推して詩の本質を、一様に持続する曖昧さを裡に孕んで言葉の意味が不安定な状態で一体をなしており、最後には基調語で決定的形態を完成するもの、と考えるならば、"dialogue of one"はその基調語にあたるものと云えよう。これによつて前に示された様々な相の難解な意味合が統合調和され、論理的ではなく詩的なcoherenceを有する全体としての詩が成就されると考え得る。我々はこの謎のような語句に、ダンが心に抱いていた統一性への熱望のepitomeを見ることが出来る。そしてこの詩の統一性乃至一貫性は、conclusionに於けるこの簡潔に表現された逆説によつて達成されていると云えよう。

我々はイメッジに課せられた彼の非論理的論理により、文脈中にparadox, irony, ambiguityなどが生ずるのを見、且つこれらの機能により諸学説から抽出されたイメッジが本来の意味を失い、全文脈を精妙に支える「情緒的等価物」と化すのを知つた。既に述べたように詩人の目的は、異なれる層の個人的経験を特異な方法で連結し、更に高度の非個人的次元でその調和の状態を表現することである。グリアスンは、「ダンの関心は彼の主題たる愛と女性に向けられており、言葉をそれ自体の目的の為には用いず、変化矛盾に富むすべての

局面に於てこの二つのものが示す、驚くべき現象から彼が得た意識を伝える為に用いている。[28]」と述べているが、もしこれを分析的に読者の立場から解明してみるならば、重要なのは言葉の文字通りの意味でもなければ、言葉の結びつきの論理的妥当性でもなくて、対立矛盾する諸要素が和解に導かれる過程そのものなのだと云えよう。そして我々は、詩に於ける首尾一貫性が詩人の採用するイメージの種類に左右されるのではなく、それを融合して一全体たる詩に造り上げる際の、劇的緊張の度合に拠るものであることを知るであろう。即ち如何にダンのイメージが理論的なものであれ、「適切に読んでいる場合には、知的な意味での信、不信の問題は決して起らない[29]」とみてよいのである――「適切に読む」とは、詩人が諸々の思想や出来事を混じて、一貫した有機体に仕上げた過程を詩の中に読み取ることである、ともし云うことが許されるならば……。

四

ダンの五十五の恋愛詩中、彼自身の創作とみられる詩形が四十二ある。彼が伝統的な詩形よりも自分自身の創作したものに拠ったのは、彼の詩のパタンが dramatic なものであり、「予め押しつけられていたというよりも、その場の必要から[30]」生じたものであるからである。勿論彼の詩形は、単に詩材だけの影響下に於て造られたものではない。彼の詩が、詩形と詩材の相互に制限し合う裡に生れ出たのである。彼は特定の劇的 situation が彼の内部に喚起した柔軟な動きを示す情緒に、既成の形式を適合させることが出来なかつたが故に、新しい詩形を必要としたのである。（あらゆる芸術形式が、社会的背景の所産たる時代感覚に影響されるのは当然であるが、ダンの時代の所謂 "cross currents" 的性格に就いてはここでは触れない。）エリオットによれば、詩作の結果「最後に素材は形態と同一のものとなる[31]」のだが、詩の媒体は言葉であるので我々はとかく詩材と詩形を切りはなしがちであり、その為一般に詩全体をパラフレーズし得るものと考えている。とりわけダンの詩のような場合、詩から理論じみたものを抽出したい欲望にかられるが、詩の各細部は形態の裡に緊密に溶けこんでいるものなのである。或いは詩が生れた瞬間、細部全体が形態に変じた、と云う方が正しいかも知れない。更に、もしエリオットの言を誤解しなければ、我々が通常内容と（仮に）呼んでいるものは、本来形態と同一のものではないかと思われる。即

ち統一調和を有する詩に於て、形態とは無関係に抽出し得る内容はあり得ないのである。しかし当然のことながら、形態が何であるかを解明することは出来ない。それは或る種の均衡調和の状態を含蓄するもので、我々はそこに初めも終りも見出すことが出来ず、唯全体を感知し得るのみである、と云うより他はない。

彼の 'formless' な作品、説教集を一読するならば、我々はそこに呈示された思想の断片に何ら論理的一貫性を見出し得ない。L・P・スミスはダンの説教を解説した後、次のように述べている。

「しかもこれらの説教には彼の詩の場合と同様、やはり最終的な分析を不可能ならしめる、何か不可解なものが残っている。これらの勧告的独善的文章を読んでゆくと、次のような考えが頭に浮かぶのである。即ち、ダンは度々何か別のことを云っているのではないか、何か辛辣で個人的な、しかも結局は我々に伝達され得ぬことを語っているのではないか、と。」(32)

ダンの説教を目前で聴いた聴衆にとっては、彼が劇的な身振と音声で語る言葉の動きのお蔭で、その内容がそれ程「伝達され得ぬ」ものではなかったように想像される。唯印刷された説教が、その形態上の安定性妥当性を失ったに過ぎない。

註

(1) H. J. C. Grierson (ed.), *The Poems of John Donne*, 2 vols. (Oxford, 1912) pp. 51-3.
(2) T. S. Eliot, *Selected Essays*, 3rd ed. (Faber and Faber, 1951) pp. 138-9, "Shakespeare, and the Stoicism of Seneca."
(3) Ibid., p. 288, "The Metaphysical Poets."
(4) Grierson, op. cit., vol. I, p. 258, *Of the Progresse of the Soule*, ll. 244-6.
(5) I. A. Richards, *Principles of Literary Criticism* (Routledge & Kegan Paul, 1924) p. 273.
(6) T. S. Eliot, *On Poetry and Poets* (Faber, 1957) p. 117, "The Frontiers of Criticism."
(7) C. M. Coffin, *John Donne and the New Philosophy* (Columbia, 1937) p. 283.
(8) Eliot, op. cit., p. 303, "Andrew Marvel."
(9) Grierson, op. cit., vol. II, Commentary, p. 42.
(10) Grierson, op. cit., vol. I, p. 22, *Aire and Angels*, l. 7.

(11) E. M. W. Tillyard, *The Metaphysicals and Milton* (Chatto & Windus, 1956) p. 80.

(12) Grierson, op. cit., p. 219, *To the Countesse of Bedford*, ll. 34-6.

(13) Ibid., p. 225, *To the Countesse of Salisbury*, ll. 52-4.

(14) E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture* (Chatto, 1943) pp. 25-6.

(15) William Empson, *Some Versions of Pastral* (Chatto, 1935) p. 135.

(16) Grierson, op. cit., vol. Ⅱ, Commentary, p. 43.

(17) Ibid., p. 44.

(18) Eliot, op. cit., p. 138, "Shakespeare and the Stoicism of Seneca."

(19) Robert Burton, *Anatomy of Melancholy* (1638), p. 15, quoted in Grierson, op. cit., p. 45.

(20) Grierson, op. cit., p. 42.

(21) Eliot, op. cit., p. 293, "Andrew Marvel."

(22) Grierson, op. cit., vol. I, p. 15, *The Canonization*, ll. 26-9.

(23) Ibid., p. 83, *Elegie* Ⅲ, ll. 35-6.

(24) Cf. Tillyard, *The Metaphysicals and Milton*, op. cit., p. 83.

(25) Basil Willey, *The Seventeenth Century Background* (Chatto, 1934) p. 45.

(26) Grierson, op. cit., vol. Ⅱ, Commentary, pp. 43-4.

(27) Joan Bennet, "The Love Poetry of John Donne," in *Seventeenth Century Studies Presented to Sir Herbert Grierson* (Oxford, 1938) p. 87.

(28) Grierson, op. cit., Introduction, p. xlii.

(29) Richards, *Practical Criticism* (Routledge, 1929) p. 277.

(30) Joan Bennet, *Four Metaphysical Poets* (Cambridge, 1934) p. 48.

(31) Eliot, *On Poetry and Poets*, op. cit., p. 101, "The Three Voices of Poetry."

(32) L. P. Smith (ed.), *Donne's Sermons: Selected Passages* (Oxford, 1919) Introduction, p. xxxv.